武田泰淳全集

第八巻

筑摩書房

武田泰淳全集　第八巻
昭和四十七年四月二十五日　第一刷発行

著者　武田泰淳
発行者　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社　筑摩書房
電話　東京(元二)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三
郵便番号　一〇一―九一

印刷　株式会社三松堂
製本　和田製本工業株式会社

(分類) 0393 (製品) 72408 (出版社) 4604

武田泰淳全集　第八巻

第八巻　目　次

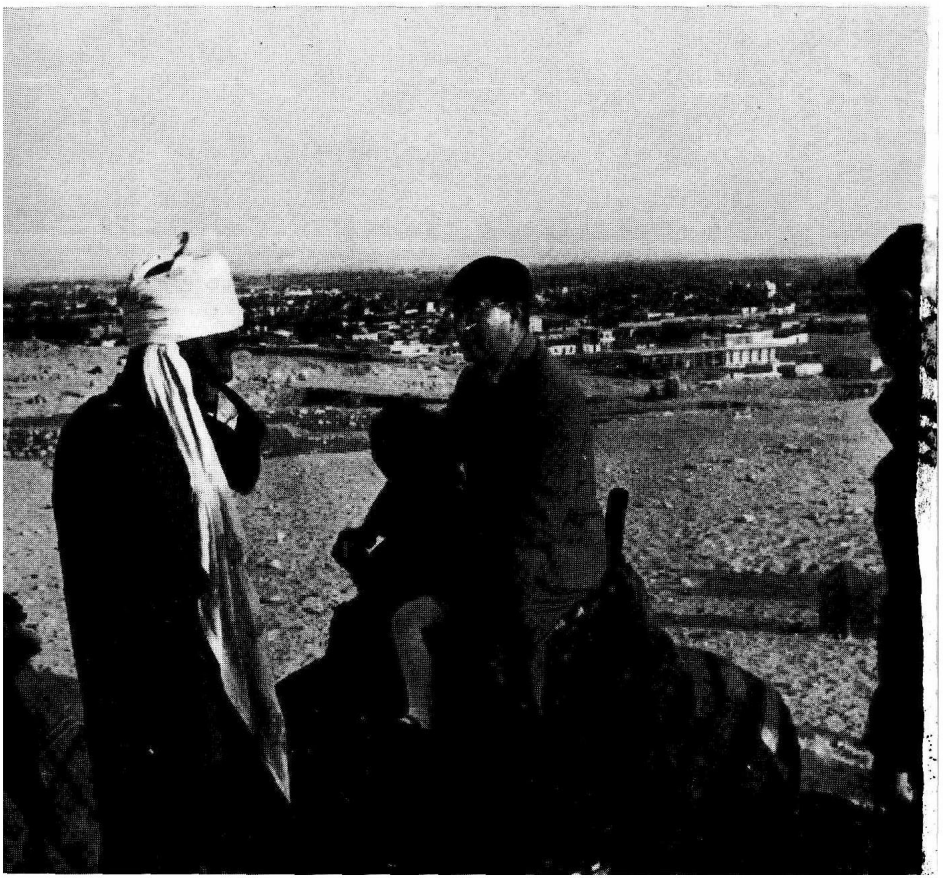
ピラミッド附近の行方不明者……3
ニセ札つかいの手記……53
鍵をかける……89
花火を見るまで……108
わが子キリスト……121
国防相夫人……182
新・東海道五十三次……202
解説……森川達也……367
解題……375

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小

説

8



カイロにて　昭和三十七年（五十歳）
アジア・アフリカ作家会議出席のとき

ピラミッド附近の行方不明者

K・L・Mと言えば、オランダの航空会社。ルフト・ハンザは西独の航空会社。二月八日に発つはずのルフト・ハンザは、七日の朝、ニューデリーでエンジンに故障を起したそうでした。そうでしたと申すのは、ハネダ国際空港では、その遠く遠く、インドあたりで発生したジェット機の「病気」の程度など、そうそう急に診断するわけにはいかないからです。政治感冒の流行のおかげで、どこかの名医のカルテにしたがって、仮病が「病気」として公表されているのかもしれない。そういう疑念をいだいた代表者も、私どもの団員の中にはいたのでした。

「発達しつつあるAA諸国家における衛生問題の会議」に出席するため、われわれ五名の日本代表団は、八日の午前十一時に、空港ロビーで立往生をさせられたわけなのです。

われわれは午前九時半に、すでにルフト・ハンザの航空カバンを肩からぶらさげ、窓口というのかフロントというのか、とにかく制服の受附係りのいる番台みたいなモノの一列に並んでいる、その中の「L・H」の看板をかかげた所にたむろしていました。

窓口が一つちがえば、ハワイへ行くか、ベルグラードへ行くか決まってしまうのですから、国際会議なれのしていない私などは、よほど緊張しているし、たえずパスポートをおさめた内ポケットにさわったり、機内持込を許されるはずの荷物の荷札をしらべたりしている。「灼熱の砂漠」というから、たぶん真冬でも暖いだろうと考え、うすいレインコートの下に厚地のセーターを着こみ、その下のワイシャツのポケットには、日本の航空観光会社が換えてくれたポンド紙幣、用意してくれた小切手帳（トラベラーズ・チェック）を容れた封筒をしまってあり、その紙幣は「何ポンドが何枚、あとはこれとこれと何枚、こまかいのでちょうだい」と、天野鶴女史が頼んだのに、まねして頼んだので、観光会社の社員からいきなり手わたされても、新発明の培養基で、うまいこと培養された、名のわからぬ細菌

を何種類も一ぺんにかかえこんだような気持で、不安でならない。

「早く鶴さんが来てくれればなあ。そうすれば、どうしたらいいか決められるんだがなあ」

と、私たちは、雲と霧に巻かれてしまった、初心の登山者のように、しょんぼりしていた。

団長の倉博士は、大会の準備委員として、すでに一週間前に出発してしまっているし、国際会議がはじめてなのは、私一人だとしても、みなさん事務的な能力、ことに渉外関係となると、さほど自信のある方はいらっしゃらないので、やはり、東西両陣営を股にかけて活動なさる、ツルさんが頼りになる。

「両陣営をマタに」と称しても、天野さんが革新派にぞくする、ツルのようにスラリとした美しい知的な三十女であることは、まえまえから、世間にうとい私も承知していました。現代日本の女流評論家には、美女が多いという話ですが、わが医学界から売り出した国際的な女性として、ツル女史は、芸能、文学、絵画、音楽の代表選手たちにひけをとるどころか、断然、他を圧して綺麗な婦人でした。バレー・ボール競技に出場させたいほど、長身で、試合なれがしている上に、英語はアメリカ南部の田舎女などに負けないほどである。

「あなたがた、何してるの？　こんなところで。え？　どうしたの観光会社の人。だらしないなあ」

女学生のような秘書をひきつれて、サッソウと乗りこんできたツルさんは、私たちの旅行万たんを世話する係りを、すぐさま叱りつけました。

「昨日の何時にニューデリーで？　故障したって言ったって、もう香港までは来てると思うな。エンジンだったら、交換できるだろうし。香港まで来てれば、便が多いんだもの、何とでもなると思うんだけど。それで、今日のハネダ発の香港ゆきは、何本あるの？　あなた、しらべた？　それから、香港発、カイロ行きの方も、ききただしたの？　明日のK・L・Mに乗れるのは、わかりきってるけど、それじゃ三十二時間は、おくれることになるわよ。会議の一日前には到着してなきゃ、分科会の分担をきめることもできないじゃないの。倉さんだって、あわてちまうし……。今日のうちに、何とかして発たなきゃ、だめよ。乗り換えの手数なんか、何でもないもの……」

我々の予約しておいた二階の控室は、いちばん小さくて、閑散としている。政府の高官と、アメリカの偉い人が出発する日にあたり、かつて全学連の学生諸君が占拠した食堂のあたりは、見送りの人々で、通行が不自由なくらいである。腕章を巻いた警備員、汗だくになっている荷物係り、

白布をたれたデスクにひかえている受附嬢。それらの、にぎやかに右往左往したり、厳格かつ機敏に目を光らせているエネルギッシュな男女は、我ら一同とは全く無関係に活動している。

「そやけど、そういそいだかて仕方なかろうがなあ。香港まで行ってしまってからに、便が悪うなったら、どないしますか。行きつきさえすれば、いいんじゃから、なるべく安全な方法をとってほしいね」

名古屋の大病院の院長（実はご隠居さま）をやっている大屋老人は、小がらな背をちぢかめて、つぶやいている。若いころは、船医として、濠洲、西インド諸島、フィリッピン、マレー半島などめぐり歩いているだけあって、六十歳にもかかわらず、顔の血色は団員の誰よりもよろしく、うす赤い口髭などはやしているところは、バタ臭くて、ベレーをかぶったりすると、イタリヤの老水夫とでも言いたくなる人です。

どちらかと言えば、保守派、政府系の立場にある、この隠居さまを団員に加えたのは、急進派の根拠地、「人類の医学」の編集長、天野ツル女史と、団長の倉博士だったのですから、もともと今度の人選は、なかなかどうして「戦術的」なものだったらしいのです。

ツルさんが活潑になりすぎると、いつも大屋老は、皮肉たっぷりな苦笑をうかべ、私の方へチラリと横眼をながす。表だって抵抗することはないが、「そら、はじまりましたぞ」と、いくらか意地わるく、おもしろがっている。

後進国、低（未）開発地、AA諸国、あるいは、発達してしまった欧米諸国とは立場を異にする「ゲンに急速に発達しつつある諸民族」については、おそらく天野さんより、大屋さんの方が経験を積んでいる。しかし、これらの（おくれた、いや）まさに追いつこうとする諸民族に対する熱情においては、女史が燃ゆるがごとくであったのに、老人の方は、死んだ灰のように冷淡でありました。

ただし、ツルさんの方だって、老院長の政治色、人生観、家庭内の事情までよく知りつくしている上に、進歩的女医に対する年よりくさい批判の眼も、肌身に感じているのですが、

「グランド・パパ（祖父）さんは、心配なさらないで、若いものに委せておけばよろしいのよ、ね」

などと、やわらかく無視している。つまり、ミス天野は、頭のきれるインテリのチャキチャキで、乾燥した空気を発散しているにもかかわらず、ある種の女子大生、女医、看護婦長にみうけられる、我々をして人間に絶望させるようなツンケンしたところが、全くなかった。あと腐れなくアッサリしていて、気持がいいが、男みたいな口のきき方を

するわりあいに、女性らしいふくみもあったわけです。
「桃さんは、どうしたんかな。まだ、あらわれておりませんが」
大屋氏の方も、鶴嬢を無視したように、淋しい控室の中を見まわしている。
「あら、そうね。彼女また、おくれてるわね」
この代表団には、天野さんのほかに女性団員が、もう一人参加している。九州代表の、桃春子さんという、二十八歳の、これまたすばらしい美女であります。
天野嬢をパール（真珠）色にかがやく、硬質な美女とすれば、桃さんは、水蜜桃の甘い匂いをただよわす、ピンク（桃色）レディと形容したいところで。相談会の時間には、かならず遅刻するし、もの忘れがひどくて、たえずハンドバッグや、ふろしき包みの中をかきまわして、困っているようなタチで、その日も、姉さんにせきたてられて駈けつけたものの、「あら、私、腕時計を忘れてしまって」などと、ぼんやりしてソファに腰を下ろしている。
「春子さん、我らの飛行機が、ニューデリーでエンコしちゃったのよ。どうしようか」
と、ミス天野に質問されても、
「あら、私、ちっとも知らなかった。……そうね、どうしましょうか」
と、ひとごとのような無関心さで、宿題をやってこなかった小学生のように、おとなしく下うつむいている。そうして、姉さんと一しょに、どこかへまぎれこんでしまって、なかなか指定の場所にもどってこようとしない。
「やれやれ、桃さんはあの調子だから、我々だけで決定すればよいとして、さて、嶽さん、あなたどう考える」
小生、嶽文夫は、北海道代表の、細菌学者として参加している。冷寒地帯の無医村は、これでも足まめに調査して、衛生状態の統計表だけはキまじめに発表しつづけている、その功績を買われて、代表にえらばれたのでしょう。私は、三十一歳。ミス・アマノ（三十五歳）、ミス・モモ（二十八歳）の年齢のちょうどまん中にはさまれた、男性団員の中の最年少者だった。
カイロまで旅行するには、どうしても四十万円はかかる。私のような貧乏ドクターが参加できたのは、知床半島のアイヌ系の網元と、知床とはちょうど反対側の北の海辺、シヨザンベツの村長が、めいめい二十万円ポンと投げ出してくれたからです。私の調査統計表は、厚生省でも高く買われるようになっていたし、私の報告にしたがって、厚生福祉の予算がまわってくる山村、漁村も多くなっていたので、町長、村長が私をたよりにしてくれる利点もあった。もっとも、私の金主は二人とも「北海道、ホッケエドウと、内

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地の連中はバカにするだが、アフリカなんかじゃ、もっともっと未開発のひでえ所があるにきまってるから、道内からあんたが出向いて行って、とっくりとソコを見てきて下さい」と、注文があった。国家の予算を分けてもらうには、自分の村の衛生状態の劣悪さを、大げさに騒いでもらった方がトクだが、愛郷精神から発言するとなると、自分たちの居住地より、もっと劣悪な条件の下に暮している、もっとみじめなアフリカ土人もいるんだぞと、ソコの所を立証してもらいたいのです。バカにされたくない、誇りをもちたい、日本国内におけるアジア・アフリカ的現実（ミス鶴のコトバ）におち入っているにしても、おれたちの方が一段上なんだぞという優越感は強めたい、その必死の願いのおかげで、私は、旅費をととのえることができた。私のほかの四名だって、どこから、どういう欲望を手がかりにカネを引き出してきたか、私には不明ですが、人類全体の衛生問題、ことに熱帯地における公衆衛生、いわばアジア・アフリカの民衆の「生命」をまもるための医学者の会議といったところで、その派遣団の資金源については、いろいろと複雑なもつれ、白いような黒いような渦や滝から生れたものにちがいないのです。知床半島の網元、初山別村（ショザンベツ）の村長だって、救われる側として身をかがめるよりも、救う側としてのびのびと背骨をのばし、かがめている連中に「救い」の手もさしのべたくなる。それと全く同じように、たとえ政治的立場は分裂しているにせよ、我々五名だって、「救う側」。優秀な衛生学の選手として、白い手を黒い泥でよごすため。「彼ら」にかわって非衛生的な状態を改善し、疫病、伝染病を防止し、「彼ら」の手助けをし、指導員となって、より衛生的な「地帯」をつくり出すために、敢て二十三時間の空中旅行ののち、「彼ら」の土地に到着しようとしていたのではないでしょうか。

「……ぼくも、安全な方法をとった方が、いいと思いますが」

と、私は答える。私にしてみれば、今回の大(?)旅行は、北海道に住みついたきり、一度も海外へ渡ったことがないだけに、ただピラミッドのそびえるカイロへ行ければ、それでもう満足なので、会議そのものに対しては、どんな主張をする、どんな収穫を得てかえるという、明確な目的があったわけではない。もちろん、アフリカ諸地方における「衛生学」は、日本にくらべれば問題にならぬ、ゼロに等しいものであるから、サニタリー・エンジニアリング（衛生工学、衛生設備）で学ぶべき点は、一つもありそうにない。ただし、衛生学を応用しなければならぬ、悲惨な情況、条件、材料はゴロゴロころがっていると言うより、むしろ息ぐるしいほど充満しているにちがいない。だが、絶好の

「材料」（失礼な言い方ではあるが）としてのアフリカ人に、しっかりと取組むには、一週間や十日では、お話にならない。結局、その方面では、シュヴァイツァー先生の半生にわたる献身的な事業の足もと、爪の先にも及ぶことはむずかしい。日本国内の貧しい老人、恵まれない児童たちの、非健康な現状を置き去りにして、わざわざ名前も知らなかったAA新興新独立の諸国家の会議などに出張しないでもよかろうという、うしろめたさもある。

また一方、地球上の人種が平等に、よき公衆衛生によって「生」を守られるためには、あくまでインターナショナリズムによって、仲良く手をにぎりあっていかなければ、完全な解決は不可能であるという、国際派、社会科学派の考え方もあります。

そもそも「衛生学」は、自然科学プラス社会科学という、特殊の医学として発達してきた。良き衛生の保たれている社会こそ、良き社会である。その考え方をつきつめて行けば、良き社会をつくり出してからでないと、良き衛生を保とうとしても、しょせん、それは机上の空論にすぎないという意見が出てくる。天野ツル氏は、この派の信念の代表選手である。したがって、AA公衆衛生大会に出席する彼女の覚悟は、決して派手な国際舞台ではなやかに活躍しようなどという、利己的な動機によるものではなく、まずA

A諸民族の政治力、あるいは眠っていた（あるいは眠らされていた）暗黒大陸の潜在エネルギーを爆発させることによって、その火力、熱力と「人類の医学」的な衛生学を結合することによって、地獄を楽園にかえる路をきりひらかんとする善意から生れていたのです。

彼女の叱咤激励にもかかわらず、やはり我々は、明日のK・L・Mを待つことになりました。

「オランダは、たしかアフリカに植民地を持っていたはずだから、大丈夫かい。オランダの飛行機に乗って行って、アラブ聯合の代表者が怒りゃせんかいな」

「そんなこと、何も気にすることないわよ」

と、彼女は、皮肉たっぷりな大屋氏の発言を一蹴しました。

出発は遅れたけれども、カイロ行きの飛行機に乗りこんだつもりで、ジェット機内の相談会をこれからトウキョウで開きましょう、とツル女史が提案したとき、私は「国際会議は、出発するまでにくたびれてしまうなあ」と思いました。

彼女にみちびかれ、羊飼いの後にしたがう小羊のように、我ら一同は、「人類の医学」の発行所、銀座の小ビルの片隅まで、ゾロゾロと引き揚げて行く。ゾロゾロとは言っても、A新聞、M新聞（AA関係は大新聞社には毛ぎらいされているというわさであったが）の社旗をひるがえす高

級車に分乗して、乗りつけたわけだ。

日本代表の提出する「報告書」、倉団長の演説する「日本案」の内容が、もう二、三回も検討されているのに、またもう一度、読みあげられ、各自の意見を求められる。

我々の会議が開催される二週間前に、カイロでは、AA作家会議という、文学者、つまりモノを書く人々の国際大会が終了していた。この方には、日本から十一名が乗りこみ、木下順二（劇作家、英文学者）の演説は、イングリッシュの正確さ、堂々たる態度、反帝国主義、反新植民地主義で一貫した論旨も立派であり、大へんな評判になり、かつ、松岡洋子、三宅艶子という二人の美女が参加していて、それがまた黒、褐、黄、半黒、白の男性たちを巧みにあしらって、日本ブームをまきおこし、見事な成果をあげたというニュース。その情報はもちろん、天野グループがキャッチしていて、「あんな連中に負けるはずありませんもの」と、ますます熱情を増すことになった。

ミス松岡、ミス三宅は、フルシチョフ、そして、毛沢東、ナセル、などと握手したりした国際的ヴェテランであるにしても、身びいきで言うわけではないが、我が代表団のミス天野、ミス桃だって、彼女たちにくらべ見劣りがするはずはない。英文への翻訳、タイプ打ちのすべては、二人の女性がひきうけてくれる。（もっとも、彼女たちの持参する大型タイプライターと、振袖の和服をもふくめた衣裳の重量のため、男性の荷物は減らさねばならなかったけれど）

ツルさんが「日韓会談に反対する」という、ひどく政治的な提案をもち出したとき、さすがに私は、「それは、どうかな」と、気よわく反対した。

大屋氏も不機嫌そうに、口を「へ」の字に結んでいる。ミス桃は、賛成でも反対でもいいから、ワタシはツルさんの言いなりよ、と言いたげに、ながいながい電話をかけている。

「どうかなって、どうなのよ」

「うん……日韓会談まで持ち出さなくても、いいような気がするし」

すると彼女は、日本と韓国の政府首脳が会談するのは、とりもなおさず、日本の独占資本が、旧植民地に進出して、カイライ政権を悪用しようとする野望のあらわれであるから、たとえ衛生学者の集会であろうと、否むしろ、衛生学者の二年に一回の国際集会であればこそ、重大問題として取上げるべきだと力説し、そのおしまいには、

「嶽さん、そんなことがこわいぐらいなら、カイロへ行かなければいいじゃないの」

と、唐竹割りに斬りつけて来た。

今まで紹介しなかったが、黒眼鏡をかけた色あさぐろい四十五歳のハンセン氏病の専門家、島氏がそのとき、おもむろに口をひらき、

「いや、それはツルさん、ちがうんじゃないか。嶽君がこの問題を喜ばないのは、帰国してからの彼の立場が不利になるとか、そういう臆病で言ってるわけではないでしょう。あなたにそう言われると、嶽クンばっかりじゃない。我々みんなが勇気のない卑怯モノみたいになっちまうでしょ。それは、男性として、ちょっとつらいな」

スペイン、あるいはプエルトリコ島あたりに、こういう美男子が多いのではないかと想像される、白人と有色人の混血じみた島氏は、発声法までが外国人式に、明瞭でなめらかだった。西洋式の礼儀作法は、彼が一ばん心得ている。だがどうも私には、この紳士がこの団員の中で、一ばん気持のわるい、疑問の人物のように思われて仕方なかった。女にもてる男への嫉妬心のせいもあり、いつも微笑を忘れない彼の眼の光りが、どうも邪悪な暗さをふくんでいるように感じられるのだ。ヤボな山男のイキな都会人に対する、意味のない反撥だったかもしれません。

ミス天野は、淋しげに口をとじた。時々、この活気にみちたダイアナ（女神）は、淋しげな横顔を見せることがあった。それはまるではげしい日光を浴びてきらめいていた高原が、いきなり雲の影を投げかけられ、たちまち黒くかってくる、そのような淋しげな風情なのです。

「島の奴は、いつだって自分が勝つときまっているときにだけ、思い切りよく発言するんだ。会議なれした紳士は、実にいやらしいぞ」

と、私は、ミス天野の方に同情したくなっていた。

「わたしが悪かった。今の発言、とり消します」

と、彼女は低い声で言った。ミス桃は、彼女が男どもにいじわるされやしないかと、心配そうに見守っている。

「みなさん、何かおいしい物、たべましょうよ。お寿司がいい？　サンドイッチがいい？」

と、桃さんが甘ったれはじめたので、また座の空気はなごやかになりましたが。

私は、荷物の監視係り、女性のボディ・ガードをおおせつかっていた。ニューデリーよりは、ましであろうが、乞食、不良少年、かっぱらい、ゆすり、たかりがカイロの街路にたむろして居るらしいとの警戒があった。悪疫の流行する未開地に足をふみ入れるについて、作家代表団は、仲間に医者が一人もいないため、不安だったそうですが、我我は全部、あらゆる病気、負傷の手当、治療を自慢にしていた。つまり、我々おたがいが、相手を衛生学的に守ること。我々の肉体をおびやかすすべての「人類の敵」に対し

て、完全に武装していた。自己の衛生に自信なくして、どうして公衆の衛生を論ずることができましょうか。だが、悪魔のたわむれには限りがないのか、我ら五名のうち、一人は行方不明になり、一人は悲しいかな死亡されたのであります。

実を言うと、真珠夫人の淋しげな翳りのみならず、水蜜桃夫人の「淋しさ」、と言うよりは、何となくうつけたような、いつ水素ガスが漏れるかわからない風船の如き、楽しく張り切っているようでいて、ゴムのうす皮一枚がしぼむ危険性のあるような、無類のやわらかさ。この二つの、私には理解しがたい美女の異常性が、私に、コレラ患者（まだ真性かどうか不明な）を乗せた貨物船が、けだるい暑熱の港の、油ぎらつく海面のよどみにたゆたっているような、不吉な予想をあたえていたのでした。

ミス天野が厳重に申しわたしたため、ミス桃は、仕方なく予防注射（コレラ、チフス、黄熱病）と種痘をやらされていた。諸外国にも有名な、血清や抗毒性物質の発明者を父にもつ彼女は、金に不自由しない一人娘だったので、今までの海外旅行にも、注射針をきらってわがままを通してきたそうです。そのため、効き目がひどいらしく、ピンクレディは発熱で、皮膚の桃色が増し、いかにもだるそうな様子でした。

「……どうして、天野さんが副団長におなりにならなかったのかしら。団長が男の人なんだから、わたくし、天野さんが副団長になってほしかったのに」

幼女のネゴトじみた、のろのろした口調で彼女がつぶやくと、黒眼鏡の副団長、島博士の顔面はいくらかこわばって来た。

「そりゃ、こうなんじゃないかな。ツルさんは語学は達者だし、物おじしない勇敢な女性だから、団長、副団長といった恰好で、固定した椅子にしばりつけないで、機動部隊、ゲリラ隊、特攻隊みたいにして、どこの分科会へでも自由に出入してもらいたかったからではないかいな」

そう発言した大屋氏を、ミス・ツルはあわれむような苦笑で見やっていた。

「機動部隊は、いいけどさ。だからと言って、私、廊下トンビみたいに、連絡係りだけつとめさせられるのはごめんだわよ。渉外関係は、できるだけ致しますけど、自分の仕事だってやりたいもの」

彼女には彼女で、男どもがどんな謀略をめぐらそうと、立派にやってのける成算はあるようでした。

「……でも、ぼくなんか、アフリカのホテルの一室で困ったことになっちまったら、どうしたって、ツルさあん、早

く来て下さいよゥと呼びますからね」

と、私が言うと、彼女は機嫌よさそうに笑っていました。

香港、シンガポール、マニラ、バンコック。

着陸して休息するたびに、不快指数が増す。ことにバンコックときたら、こちらの肌が汗を噴き出すより先に、樹木の汗、大地の汗、空中の汗が襲いかかり、雲より巨大な湯気をたてる魔法の釜の底にうずくまる想いだった。いくら人類を病魔から防禦するためでも、こんな町へ二度と来たくないな、と私はひそかに思案していた。香港は、住民みんな目を血走らせているような、絶体絶命のケチな贅沢で、やっと誇りを保っている死にかかった都会だが、それでも飛行場では、エリザベス・テイラーそっくりの美女が、いそいそとゲイト（門）をくぐっていた。バンコックでは、いかなる美女も、湿気でむくんでしまいそうだった。

カラチのホテルで、二時間。すでに、真夜中だった。イスラム教徒風の白衣をなびかせ、黒く痩せたボーイ諸君が、一同を二人一組、めいめいの個室に案内した。そこでバスに入るか、シャワーを浴びるか、そのあとでベッドに手脚をのばすかする。

すでに我々は、エルトール型コレラ流行のうわさを耳にしていました。どの種の菌にせよ、われらが飛行し通過した南方路線こそ、この伝染病の本場であり、また我らの会議にはもっと西の熱帯の「本場」から、多数の代表者が参加してくるはずです。

御婦人は髪をととのえ、お化粧をしなおし、男性は髭をそったりして、飛行場からの迎えのバスを待つためホテルのロビーに再び集合したとき、みなさん熱気と湿気でくすぶっていた顔が、小ざっぱりと洗いすまされ、生き生きしていた。

「私、注射してきてよかったわ」

「だから、私が言ったでしょう」

大きな果実の房を垂した熱帯樹をあしらい、白く塗られた椅子を涼しげに並べ、客まちがおのバーまでしつらえた待合室で、彼女たちは仲よく、恐るべき伝染病を話のタネにしている。

「私、くやしいけど、コレラ患者、まだとりあつかったことないの」

ダーク・グリーンのワンピースに着かえたツルさんは、疲れを知らぬ鋭い目つきで、男性たちの精神状態をしらべているらしい。なぜに揃えた彼女の、長い二本の足は、白いパンプス（ヒモや飾りなしのハイヒールの婦人靴）で足首の線がキッチリと浮びあがっているので、とりわけ黒緑色の布地の下のふくらみが、エロティックに見えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com